
コトラ！

篠白 犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「トトラ！」

【Zコード】

Z5742A

【作者名】

篠白 犬

【あらすじ】

妖怪を退治するクラブ。その名も妖怪クラブ。部長空谷純が、相棒白い虎の「トトラと共に妖怪退治に繰り出す。他にもみつちゃんにメロメロの竜がいたり、薄黄色の鳥が大阪弁で話したりと大騒ぎ。阿呆ばっかの妖怪退治物語。

第一話・プロローグ（前書き）

お初にお会にかかります。篠白 犬と申します。妖怪退治物語、楽しんでいただければ嬉しいです。

第一話・プロローグ

あなたは妖怪なんてもの、信じますか？

僕は信じますよ。

だって、見えてるんですから。

とある学校に妖怪クラブなんていう部活があった。

ただし、正式な部活ではないため、クラブと名乗っているだけである。

部室も質素。

必要最低限のものしか置いていない。

だが、その最低限のものが少し変だ。

本棚には妖怪大辞典なる本が置いてあるし、御札のような、長い紙が散らばっていたりする。文字らしきものが書かれていた。

ミミズが踊つて『このよし子』とほこんな感じなのだろう。

そしてきわめつけが大きな虎。

学校のなかだというのに、堂々と毎晩をしている。

大きな牙が、口から収まりきらぎにはみ出していた。

「こじが妖怪クラブなら、この虎も妖怪なのかもしけないと思った。

ガチャリ、と扉の開く音がした。

「こんにちは、なにか妖怪で困ってるのかな？」

第一話

おずおずと少女は前にでてきて言った。

「はい、実は折り入って相談が…。」「あつ、そんなに緊張する」とないよお~、リラックスリラックス。」

多分、この人が部長だと思つ。

そんな風格だつた。

白髪の頭をしている。

ばっかり校則違反なのは本人も気付いているだらつ。
首には真っ白のマフラーをしていた。

この人の周りだけが冬みたいだ、と彼女は思つた。

真っ黒の制服にその格好は映えすぎていた。

「あ、僕の名前は空谷純、じつだいひこきじゅん。」
返すことも出来ずに軽く介錯する。

「いやあじめんね、なにも出せなくて。」

そ、そんな滅相もない、と返した。

それよりも氣になることが彼女にはあったのだ。

「あ、あの、その虎？ってなんですか？」

少女が指を指す先には先程の虎。
とても気持ちよさそうに眠っている。

「はーー、コトヲ起きてね。」

といいながら空谷は、白い虎の尻尾を思い切り踏み付けた。

「いだだだだ！痛い、痛いよー。」

ばびょーんと効果音がつきそくなぐらいの勢いだ。

怒りながら、眠っていた虎は飛び起きた。
自分だつたら…、と当てはめてみる。

たまつたもんじゃないだろ？。

「えつと、こいつはコトヲ。僕の相棒さ。」

と空谷は説明した。

「あー、ぼう…？」

「そ、相棒！つっても僕の奴隸みたいなも…」

そんな感じじゃないだろー、ヒートラのビンタが炸裂する。

「「めん」めん、冗談。」
とコトラに謝つているものの、顔は全く反省していない。

「それで、なにか相談があつたんでしょう？なんでもいいから言つてよ…って言われてもよくわかんないよね。まず、ここがなにをするといひかつていうと…。」

言いながら、小さな瓶のようなものを取り出した。

と言つてもそこまで大きいものではなく、制服の胸ポケットに入りそうな大きさだ。

それをゴムのようなキャップで閉めている。
キュポン、と気持ちのいい音をたててキャップをはずす。

「いい？よく見てね。コトラ、ハウス！」

瓶の入口をコトラに向け言つた。

すると、コトラの体はみるとこの瓶に吸い込まれていった。

「見た？」の瓶はね、召喚獣をしまつておく入れ物なんだ。コトラ、
アウト…。」

しゅるんど、瓶から「トトロははでてきた。」「そして、ボクら召喚獣は悪ををする妖怪を退治するんだ。」と「トトロ」が付け加えた。

「そして、キミの依頼はなに？」

彼女はうつむきながら言った。

「わたしの家のまわり……よく事故が起るんです。事故が起る度におかしな夢を見て……初めて見たときから……その……。」「妖怪が見えるようになつた？」

空谷に言い当てられた。

驚いた様子で続ける。

「はい、でも誰にも相談できなくて……そんなときにトトロを見つけたんです。」

「やうかそうか、これまで頑張ったね。よくやつたよ。」
につこりと彼女に笑顔を向けた。

屈託のない笑顔。

それに合わせて「トトロ」も笑う。

なんだか、気持ちが楽になつた。

「トトロの手のパターンはよくあるんだ。单刀直入に言つよ、そういうはキミを食おうとしてる。」

えつ、と思つのと同時に、彼女の目が見開かれた。

「食うつて、わたしを食べることですか……？」

見えない恐怖に体が震えた。怖い。
足がガクガクしている。

「ああごめん、もう大丈夫だよ、ここに来ただから。」
彼女の肩にそっと手をやつた。

ソファに座らせる。
そのとなりに座つた。

「妖怪なんてそつこいらじゅうにいるんだ。人の気持ちや、年月の入
つた物。全てに魂が宿っているんだよ。」

彼女の目を見据えながら言った。
彼女も頷く。

第三話（後書き）

妖怪が見えるようになりたいです。そんな思いを胸に。

「そういうものの想い、まあ心みたいなものなんだけどさ。想いが強すぎて暴走することがあるんだ。」

淡々と話していく。

ものにも心があるなんて信じられないといった様子だ。

「それが今回の事件なのかもしれないね……。」

静かに彼女に聞いた。

「ヒカル、キミ、名前は？」

「…園田幸ソノタサチです。一年五組の。」

がたつ、とテーブルの揺れる音と共に空谷は立ち上がった。

「うん、幸さんね。よろしく。」

差し出した手を、幸は握った。

この人ならやつてくれるかもしね。

だれにも見えていなかつた妖怪が見えているのだから。

「あ、ああー、みっちゃんまだ来てないよね？」

空谷がコトラに聞いた。

来てない、とコトラが返す。

そこへ、扉が開く音がした。

「うひめん遅れたー、え？ 依頼者？ めつずらじ。」

入ってきたのは女人だ。

といつても彼女も生徒。

上着のボタンを一つも止めていない、ラフな格好だ。

肩にかかるぐらいの長さの黒髪が印象的だった。

「えー、林蜜^{ハヤシミツ}つて言こまーす。よろじく〜。」

あいつたとした血口紹介に血口紹介で返す。

「純と同じ三年三組でーす。」

と言つとのと同じタイミングで、空谷が飛びかかった。

「うわーん、みつちやん寂しかったよーう！」

それを手慣れたようにかわし、蹴りを食らわす。

うげあーーと呻き声を上げて床に沈んだ。
コトラもやれやれといった顔で見ていた。

第四話（後書き）

人の名前に問題がありそうですね、だつて即席なもんもい。

それが犬クオリティ（そんなクオリティいらない）

「幸せんこも、サクラちゃん紹介してあげたら？」

「へへへ、見せたげるよ、あたしの四葉獣。」

やつひがせやく、内ポケットから小さな瓶をだしてあの四葉を放つた。

「サクラ、アウト！」

すると瓶のなかからじゅるっと鳥がでてきた。

大きさはだいたい鷹くらい。

うえからしたまで薄黄色に染まっている。

頭のてっぺんから一本の毛が生えていた。

羽根の先に向けて赤いグラデーションになつていてとても綺麗である。

「こやこやこや、初めまして。うちはサクラってこいまんねん、どつやよしじゅうへ。」

ぴょいんっ、と一本の羽を可憐らしく揺らしながら、一礼。お辞儀をしながら挨拶をしてくれた。

むくつ、と転がっていた空谷が意識を取り戻す。

「あだだだ、ひどいよ…。」

「うつさい、オマエが抱きついたとしたからだ。」
そんな空谷に冷たく言い放つ。

「じゃあ、よろしくね。」

「…………は？」

突然言われたが、蜜にはなんのことだかわからない。
空谷は笑顔で続けた。

「なにを…？」

「下調べだよ。」

平然と伝えた。が、蜜には酷なよつで。

「ああもう、いつもわたしにばつかりやらせやがって…！」

言いながら容赦なく顔にパンチをかました。

「…殴る、必要…なくない…？」

最期の一言を残して、空谷はがつくりと一度田の気絶をした。

「んで、事件が起った場所は？」

しばらくして、幸の家の近くに着いた。

着くまでにたくさんの妖怪が町中に居たのを曰いた。

毛玉のような妖怪や、一つ目の大ガラス、近くに寄らないと妖怪かどうか判断しかねないものや、家具のような妖怪もいた。

「いはーその場所つて。」

蜜は辺りを見回してみる。

害のありそうな妖怪は見当たらない。

「はい、確かにここです。」

「みつちゃん、なんか居たつな気配はしないよ。」
とサクラが言った。

「事故があつたとき、どんな夢を見るの？」

蜜はたずねた。

夢のほうにヒントがあると考えたからだ。

「ある、男の子の夢を見るんです。」

「男の子？」

「ぐり、と彼女は頷いた。

「わたしの幼馴染みだった男の子と遊ぶ夢なんです。昔、事故死してしまったんですが…。」

「へえ、そりや悲劇のヒロイ……ン、」

突然言葉を濁し、その場につづくまつた。

頭に言葉が流れ込む、田の前が歪み立っているのも苦しいくらいだ。

「だ、大丈夫ですか？」

幸が心配そうに寄ってきた。

息も絶え絶えだ、頭のなかで声がした。

幸一、近付クナ

口カラ立チ去レ

謎の言葉に意識を持つていかれそうになる。

幸ヲ返セ、幸ハ僕ノモノダ

あ、もしかしたら『マイツ』は

第五話（後書き）

いつも、相変わらずのダメっぷりをアリしております。
なにかアドバイスみたいなものや感想下さると嬉しいです。
なん小説なんてかかない子だったので…。
なにぶ

第六話（前書き）

あほっぽいやつを書くのが大好きです。六話いつてみよー！

第六話

「意識をしつかりと持て！自分が誰なのかを思い出せー。」
誰かの声が耳に届いた。

糸が切れた様に田を覚ます。
めまい
眩暈も頭痛もしない。

声の主は誰なのか、辺りを見回してみると、屋根の上に入らしき影
が立っていた。

「あ、あいつは……。」

蜜には誰かわかつたようだ。が、幸にはわからない。
そもそもそのはずだった。

「現三年一組、学校一の秀才とはボクのことさー。」

屋根の上でポーズをとっているやつは、蜜、純の同級生らしい。
とても清々しい顔をしていた。
そのポーズが格好いいなどと思っているようだ。

蜜にはあほらしくてたまらない。

「あいつは一組の遠藤和エンドウカズ、馬鹿だよ。」
と蜜の説明が入る。

幸はなんとなくそれに納得した。

「オワア——！馬鹿って言つなあ！」

そう叫んで駆けてくるが、そこは屋根の上。

期待を裏切らないほど豪快に屋根から口ヶ落ちた。

「和ハ、だいじょぶかー？」

竜が和の元へと飛んできた。

真っ青なボディに大きな翼が覆い被さるよつて生えてる。

そしてがつしりした体付き。

誰もが見れば震えあがると言えるだろ？

ただし、枕サイズでなければの話だ
(枕サイズ：自分の枕を参考にどうぞ)

その竜はとても小さかった。

男はぼろぼろだ。

屋根から落ちたのだから仕方ないだろ？

制服をきちんと規定どおりに着こなしている。

そんな和はよこれがついた制服をはたいた。

「それで、なんのよ'り?」

蜜が冷たく言った。

目線も和の方へ向けていない。

「ボクは自主的に調べて来たんだ、ここあたりなにか妖怪の反応があつてね。ねえヒュウガ…。」

ヒュウガとは先程の竜らしい。

だが、ヒュウガは全く和の話を聞いていなかつた。

それどころか、iPODのようなもので音楽を聞いている。手には、スナック菓子。

「人の話を聞けええええ！」

怒鳴りながらiPODとスナック菓子をとりあげる。

ばかん、とゲンコツで殴つた。

いつもこんな調子なのだろうか。

「いつたいなあ。そう、ぼくが探知したのさ。」
間延びした声でヒュウガが答えた。

「あんたたちも、か‥。」

少し考えた蜜はぱつとひらめいたような顔をした。
そして和の手を摑む。

「わあ、いいなあ。
ヒュウガが口を挟むが、蜜は無視して、
「林さん有難う、あとはあたしたちに任せて家に帰つてて。遠藤、
ヒュウガ、来て！」

そう言つと蜜は和を引きずりながら駆けて行つた。

あとからのんびりと追いかけたヒュウガはまたもや羨ましそうに和を見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5742a/>

コトラ！

2010年10月22日00時27分発行